

パネルディスカッション

司会（小林正弥） それでは終了時間も迫っておりますので、フロアからの質問を若干伺ってから、順番にお答えいただきたいと思います。

山脇直司（東京大学） 今日は世界的に名高い今道、伊東の両先生に、ぜひお話を伺いたいと思ってこの場にきました。それで、私が構想する公共哲学の観点から、エコ・エティカを補完するようなコメントをしてみたいと思います。倫理学の伝統には、義務倫理や徳倫理の他に善＝財倫理（theory of goods）という部門がかつて存在しました。それは、中世のトマス・アキナスの共通善思想のほかに、19世紀の偉大な宗教哲学者であったシュライエルマッハーによって、Gueterlehreとして詳細に展開されたのですが、今日ではほとんど忘れ去られています。今道先生のおっしゃる対物倫理も、この善＝財倫理という観点で、私には理解できるように思われます。なぜ今、このような倫理が必要かと言えば、グローバルなレベルでの公共善＝公共財をどう考えていくかというテーマが、国連などでも大きなアジェンダになっているからです。UNDPのGlobal Public Goodsは、自然環境をはじめ、人権、科学技術、平和、金融安定などを含む非常に包括的なコンセプトです。それは倫理的な善と経済学的な財の双方を兼ね備えた概念ですから、学際的・国際的に研究され、実践しなければならないまさに21世紀の大きな課題です。いま goodsには、かつてのbona（善きもの）という意味が含まれていないことが多いのですが、そういった伝統的な倫理観を復権させて、「地球的公共善＝財（Global Public Goods）」を保存したり構築したりすること、そしてこれと対置される「地球的公共悪

(Global Public Bads)」を除去する努力をすること、これがトランスナショナルないしグローバルな公共哲学の実践的課題だと私は考える次第です。以上、私なりの観点からコメントさせて頂きました。

フロア 今日には専門家の集まりの中にいますと、私のような技術屋からすると、少し違和感があったので、大変失礼ですけれども伺いたい。一つは「良い技術と悪い技術がある」ということで、これは単純化しすぎていると思います。例えば原子力発電は良い技術ですか、悪い技術ですか。100年のスパンで考えたら非常に良い技術、一番安いエネルギーです。1万年のスパンで考えたら、どうなるか分かりません。私は実を言うと、原子力の日本への導入に多少関わった方の教えを受けている。他にも例えば遺伝子組み換え作物というのは良い技術か悪い技術か。もしかしたら良い技術かもしれない。それから遺伝子治療はどうか。ナノテクノロジーはどうか。分からないことはいっぱいあるのです。そのへんで研究者はみんな悩んでいる。基本的には人間の欲望がこのような問題を生じさせているのです。今たくさんコンピュータを使って便利な暮らしただけでも、個人情報全部 google に集まって、google が世界中の情報を管理するとなると、どういう世の中になるか。考えれば難しい話ばかりです。私は地球環境の中のエネルギーとか資源の総量が一応決まっているという考え方からいくと、アメリカや日本は普段の生活を落とさなければならない。今のままでいけるという考え方に立脚している学問は、それこそ危機管理に乏しいと、私は思っております。

古沢広祐（國學院大學） 論点として二つほど出したいと思います。

一つは技術連関に関連して、現代の文明社会のあり方と関わることですが、それがもっている課題というかスケールをどうとらえて、どのようにコントロールしていくのか。間接的には技術連関の問題ですが、より直接的に言うと、例えば広く構造的暴力というような問題があります。あるいは、さまざまな形

での責任の問題がある。そのときに、今日のお話は倫理というアプローチからの対応なのですが、私の理解ですが、倫理とは個から出発する、個の制御や規制のあり方から、それが集団化していく、あるいは社会化していく展開なのだと考えます。その中で、個が責任をもちうるもののスケール、それは現代的にどこまで可能なのか。あるいは、それをどこまで個が認識できるのか、という限界性に関わる問題だと言っているかと思えます。その点は、ある意味ではレベル分けの問題とも言えますが、もう一方では公的な規制、制度からそれをコントロールするという枠組があると思えます。そことの相互の関係の中で、いろいろなことが出てくると思うのですが、一点だけ、国家という問題が先ほど出ていたと思うのですが、制御の主体は権力的な要素を必ずもってくる。その関係性をどのようにとらえるか、先ほどの個からの出発という点では、上からの公的な制御は性格が違うわけですが、そこをどういうふうに規定するのかという論点があると思えます。

もう一点は、それに関連するのですが、広井先生のお話とも関連するのですが、資本主義システムをどのように位置づけているのか。あるいは市場化する力をもっているものを、どのように位置づけるのか。先ほども物質化とか情報化というお話がありましたが、特に文明のあり方であったり、私的所有のあり方であったり、富という問題であったり、そういうものと絡んでくるのですが、特に広井先生がおっしゃったように、サービスの情報化のシステムが、市場化の流れとどう重なり、それが私的所有のあり方を超えていくような制度的な展望がありうるのか。先ほどと関連する問題ですが、ご意見をいただきたいと思えます。

佐藤健吉 (千葉大学) 工学部の都市環境システム学科に勤めております。私は実は、今道先生が日経新聞の「私の履歴書」に書かれていたところから、あるいは機械学会の会誌を読みまして、技術に関心を持っている機械エンジニアです。私は社会との関係ということで、私の名刺には Socio-mechanical

engineer と書いています。それで、いわば、イマミチストです……。

実は千葉大学の科目の中に、「科学技術の発達と現代社会」という授業がありまして、その中で1年生、2年生に「技術連関」をご紹介しています。今の社会は科学技術が空気のようにになっている社会だということを伝えていきます。それから学部の方では、「風力発電技術連関」という科目を行っています。それから大学院では、「都市システム技術連関論」、というふうに、技術連関という名前を冠した授業をやっていきます。日本機械学会の技術と社会部門、あるいは日本技術史教育学会で活動していますが、今の技術のありようが若い人たちにどういう影響を与えているかということをお伝えしようとしているのです。

そういった場合、先ほどのお話の中で、機械に対する徳という話題がありました。正確性とか定点性というお話がありました。先生は、今日は電車であられたということでしたが、例えば今の世の中で人身事故が多く起きて、正確性が損なわれています。それは何故でしょうか？あるいは、JR西日本での事故でも、今日の社会の問題が原因して起こっていました。技術者の問題では、三菱ふそうトラックの問題。これも機械や安全の問題です。エンジニアあるいは設計者の徳ということが話題にされましたが、まさに技術連関は空気であって、そこに我々が生きているということが、ものをつくるエンジニアの中に意識として埋め込まれている必要があります。それを学生に伝えています。

責任として、responsibility と accountability とを分ける必要があると言われましたが、我々は、今は組織の中に生きている人間ですので、accountability ということが大切です。その意味は、頭を下げなくてもいいことを事前に行うということが、求められているわけです。今日はいろいろ勉強させていただいて、日ごろ個人的に感じていることをまとめていただいて非常にありがたく思いました。

司会 では時間も終わりに近づいておりますので、順番にお答えいただきたいと思います。

今道友信 いろいろご質問いただいて、ありがたく存じます。最初の方のご質問は前からの続きでございますが、倫理というのは人間自身の問題ですから、結局はその方のおっしゃるとおりだと思うのです。私は、技術は無記であると思います。無記というのは良いか悪いか分からないもの、良いとも言えないし悪いとも言えない、そして使い方によってはどうなるか分からないものという意味です。だからこそ、技術連関における人間の倫理的意識が大事だと申し上げております。

それから二番目の方の質問は非常に難しい質問で、私は資本主義が倫理的にどうであるかについて、未だに答えることができないのです。他にいろいろな経済の方法はあるでしょうが、一番言われるのは市場原理とかそういうことですので、これは逃げるわけではありませんが、お答えできないので残念です。ただ国家というものについては、私は昔から考えておりますが、国家はそれに属する個人にサービスをする機関だとしか考えておりません。ですからパブリック・サーバントという言葉があるのです。日本のように偉い人が発信して、管理があって、下の者が指令言語で動くというのは、かつての国家の姿です。今はそれが変わりつつあって、近代国家はやがて滅びると思いますが、これからの国家がどういうふうになるかということを経理の立場で探していくことが務めだと思っております。

それから風について一言だけ申し上げておきたいと存じます。先ほどご発言いただいた方にも感謝いたしますが、技術連関について、風について、それから日本文明について、伊東先生が非常に勇気を与えてくださるようなことをおっしゃいました。ただ日本の「風」は危険なところがございます、日本の宗教と言われている神道の場合、延喜式のときに決まった大祝詞がございますが、国中に罪や穢れがあふれてきたら、祝詞をあげます。すると山から風が吹いてきて全ての罪が水に流され、水に流れたものは海に流され、その罪や穢れは海の底にいる神様が飲んでくれると考えられております。ですから神道という伝統的な思想には、後悔も謝罪も償いも、これから更生しますという誓いも何も

ありません。それで、儒教や仏教がきたときに、それらが日本の本当の精神を内面的に支えるものになっていったのです。そういうことも考えながら、「風」というものがこれから大事だということになってきますので、フィフティ・フィフティのところで大事にしたいと思っております。

伊東俊太郎 まず風のお話は面白いですね。でもそれは風の悪用です。本来の風はそんなに悪いことはしませんよ。花鳥風月が尊重される場所では、そこは最後に日本人が安住する場所ですね。しかしそれは日本人だけではない。本当は世界中の人が安住するはずなのだ。

それから、良い技術、悪い技術というのは単純だというのは、その通りですね。それから中立的とおっしゃった。私は一つ体験を言うと、私は科学史家ですから、J. ウィルソン編『我らの世代に起こったこと』という本を読みました¹。原爆を作った科学者の話。そうしたら、自分はここではこんな良いことをした、技術的に成功した、万歳、万歳、万歳という話なのです。その中で一人ぐらいは、こんなものができたら大変なことになる、何十万人が死ぬような爆弾を使ったら大変なことになる、ということに少しでもふれているかと思ったら、一言もふれていない。だから私は科学でも技術でも、その研究集団の檻の中に入ってしまったら分からなくなるかもしれない。マンハッタン計画の檻の中に入ってしまったら。あの中に入ったら分からなくなる。そういう技術主義的成功だけで評価する。みんなもその中で認め合うからね。それで結局あそこまで行ってしまう。科学者は科学者である前に人間ですからね。そういう広い立場に立ってやっていくことが必要です。この前アイヒマンの記録を読んで、ユダヤ人を殺したアイヒマンは、「自分が裁判を受けるのは不思議だ、変だ、分からない」と言っているのですよね。自分は忠実に自分の任務に尽くしたのだからどうし

¹ この本の原書はアメリカで1975年に出版され、1979年にこのタイトルで邦訳された。その後、1990年に岩波書店の同時代ライブラリーに収録されたが、その際に『原爆をつくった科学者たち』と改題された〔編注〕。

てそうなるのか、最後まで分からない。そういうことがありうるのだということですね。それを原爆をつくった人たちに移して考えると、そういうことがある。だから原爆をつくった人が、日本に来て原爆の生き残りの人に会って、インタビューをテレビでやっていましたが、「私は絶対謝りませんよ、私は私の科学者としての義務を果たしたのです」ということでした。「科学者としての義務の前に、人間としての義務はどうなのだ」と私は言いたかった。だからそういう科学の専門の枠を離れて見る見方というのが必要ではないかと思いますね。私が言いたいのはそういうことです。そして今、私は技術者として悩むとおっしゃった。それは非常に貴重なことだと思いますね。そこから始まるのだと思います。ですから、あらかじめ技術が良いとか悪いとか、分からない部分がある。でも相当な部分はそれを開発した人が知っています、他の人より。だからやはり責任があります。

それから資本主義をどうするかという問題。難しい大きな問題です。今道先生は良いか悪いか分からないとおっしゃる。私はもう少しはっきりしています。ダメです。少なくともこのままではダメです。なぜかという、結局、利益追求に終わっているではないですか。ホリエモン氏の発言を考えてみましょう。自分の株価総額を世界一にする、それを目指していると彼は言っていますよ。何でそんなことに価値があるのか。それから村上ファンド。お金を儲けることが悪いことですか、私の答は「悪いに決まっているじゃないか」。そのお金がどんなことに使われるかということを全然考えないのなら。ただ儲けるだけの資本主義は社会を毒している。これはすごい荒廃を生むでしょうね、格差どころの騒ぎではない。コンピュータの前でほとんど動かないで金儲けにふける。今の情報資本主義は。ではどうしたらいいのか。社会主義がなくなってしまった。なくなったから資本主義も悪くなったのです。あったときには資本主義に対抗するものとして緊張していた。今は勝ったから良いのだという、とんでもない話。社会主義は自滅したのであって、決して資本主義が勝ったわけではない。ではどうするか、私も考えましたよ。経済学者があまり考えてくれな

いから。結局こういうことになった。お金は儲けるでしょうね、企業だから当然。そのお金はどうするのですか、ということなのです。それを世の人々のために使っていく。それをフィランソピーというのはとんでもない傲慢だと思います。フィランソピーというのは困っている人々を慈善で助けてあげましょうということでしょ。冗談じゃない。企業とはいったい何のためにあるのか。これが環境を含めて、社会を良くするためにあるのだ、ということが確認されたとき、はじめてその企業の活動は是認されて社会的な信用をもつのです。しかし今までの経済学はそれに注目してこなかった。例えばシュンペーターはどうですか。やっていないでしょう。シュンペーターは技術的革新ということを言った。技術的革新をやれば、新しい技術が進んでもっと利益が上がるだろう言った。それからケインズ、有効需要を人為的に喚起する。こういうことばかりやっているのです。今我々が真剣に問題にしているようなことを、経済学は抜かしているのではないですか。これは資本主義の根本的な欠陥だと思います。だから私は今の資本主義のあり方は変える必要があると考えます。

鬼頭秀一 技術連関のコントロールという話と多少関係があるのですが、別の形で倫理のほうから答えてみたいと思います。「徳目」という議論が多かったので、倫理というと、個人の行動の規範に焦点があたってしましますが、倫理の問題は個人の行動規範のことだけではありません。それを超えて、技術がどうあるべきかとか、政策がどうあるべきかということも、理念の問題であり、倫理の領域です。今道先生のお話の中にも委員会の話もありました。倫理の側からも技術のあり方や政策のあり方について議論しなければならないと思っています。

そのことに関して、先ほどの「良い技術」と「悪い技術」という問題は、これは大変重要な議論なので、一言コメントさせていただきたいと思います。これに関しては、技術の中立性という視点から今まで随分と議論されてきました。その議論ももちろん重要です。近々で言えば、昨年（2006年）に亡くな

られた宇井純さんを追悼する偲ぶ会の関連で、6月23日に東京大学の安田講堂で「宇井純を学ぶ」という企画を立てていまして、私はそこでそのへんの話をしようと思っています²。でも、今日はそういう話ではなくて、中立性ということとは違う形で、ご質問に答えてみたいと思います。

科学技術をどう評価するかというときに、その技術が、例えば環境のことを考えたり、人間との関係であったり、いろいろと評価基準はありますが、それ自体で、良いのか悪いのかという議論がよくあります。例えば、原子力発電所の技術は悪い技術だが、太陽光発電や風力発電は良い技術であるという形の議論です。私はこの種の議論は結果的に不毛だったと考えています。というのは、技術というのは、社会の中で独立したものとして存在しているのではありません。技術というものは、さまざまな社会的な状況設定、それはマーケットなど経済的なものから、その技術を資源的に支えている経済的、環境的状况、そして、技術を実際に動かしている技術者の背景にある技術者集団、それを養成し、支えている仕組み、そして、新しい技術が既存の技術、特に伝統的な技術や地場産業などの地域に固有の社会的基盤等々の関連の中で初めて存立しています。以前、中岡哲郎さんが日本の近代の技術移転を分析したときに、社会経済的リンクという用語でそのことを説明していました。

そのような技術のあり方の前提から考えると、「良い技術」「悪い技術」という議論は、技術それ自体ではなく、その技術がその周辺の社会経済的な状況とどのような関係を持って存在しているのかという視点から分析し議論するべきだと思います。その視点から、今後あるべき技術のあり方として、私は四つぐらいの類型を考えています。(1)普遍性を目指すのではなく、地域性に重点が置かれる(多元的な知)【生活知の空間的集積】、(2)地域社会の歴史性、文化性を考慮する(歴史・文化文脈的な知)【生活知の時間的集積】、(3)地域社会の、社会のあり方、合意形成のあり方を考慮する(参加型の知)【生活知の集合的集積】

² 公開自主講座「宇井純を学ぶ」は2007年6月23日(土)に予定通り開催され、盛況のうちに幕を閉じた〔編注〕。

(4)完全性を目指すのではなく、不完全性に意味を見いだす（開かれた知）【予防原則と順応的管理の必要性】。

これと関連して、技術が適正性を保つためには、もともと持っている技術の根源的不確実性を前提に、社会の中にうまく埋め込まれて存在するために、四つほどの装置が必要です。それは、リスクマネジメント、順応的管理、予防原則、ローカル・ノレッジ（生活知）です。社会の中で技術がそのような装置をうまく組み込んでこそ、技術の適正性は保たれるのだと思います。

「リスクマネジメント」は不確実性に対してどういう形でコントロールするかというやり方です。生態系管理でよくやられている「順応的管理」(adaptive management)は、不確実だから、少しやってみてダメだったらきちんとフィードバックするということができることです。何かあっても暴走しないで、少しずつやってみて、何かまずいことがあればきちんと撤退するというのをどう組み込むかということが重要です。「予防原則」(precautionary principle)は、これは不確実性を前提とした上で、何らかの重篤な問題が出るということが予想される場合には、それは問題があるからやらないということが当然あるでしょう、というものです。最後のローカル・ノレッジに関連して言えば、科学者が社会に開いているということが重要です。「地域知」や「生活知」のようなものをどう有機的に組み込んでいくかということです。このような装置が、技術の中できちんとコントロールできる状態であるのであれば、これは「良い技術」といってもいいかもしれません。

そのときに技術のあり方として重要な徳目のような形になるものとして、私は、「開いている」(openness)ということを目指したいと思います。技術が開いていなければ、リスクマネジメントもできないし、順応的管理もできないし、予防原則も適用できないし、ローカル・ノレッジをきちんと組み込むこともできない。話題に出てきた原子力技術に関しては、その技術そのものもいいか悪いかという問題ではなく、原子力技術の中に、「開いている」ということがないこと、そしてもっと重要なことは、原理的に「開いている」ということを組

み込むことができないということが本質的な問題だと思います。要するに、原子力技術は、その性格上、クローズドでないと成立しない技術であること、全ていろいろな情報を集中管理してクローズドな形にしないと成立しないということです。私は、そのような「開いている」ということを原理的に持つことができない技術は、やはりまずいのではないかと思います。技術が結果的に良いか悪いかということではなくて、技術のオープンネスというところからきちんと議論するべきではないかと考えています。

広井良典 先ほどから出ている資本主義についてですが、資本主義というのは一言で言えば「私利の追求を最大限インセンティブとして活用したシステム」で、拡大ということと不可避なわけです。今日のお話全体を通じて、私自身の課題として浮かび上がってきたのは、伊東先生の言われる環境革命が行われたときの社会システムはどういうものかということです。私の現在の関心に引き寄せて言えば、資本主義と社会主義が融合したような仕組みになるだろうと私は考えています。フランスのアンドレ・ゴルツという人が『資本主義・社会主義・エコロジー』（新評論、1993年）という本を書いています。具体的に言うと、土地や自然の所有権や税制のあり方について、もっと公的な規制を増やしていくべきであるとか、従来の資本主義とはかなり位相の異なる社会システム、あるいは労働や貨幣のあり方、そういうことが環境革命における社会システムの改革として浮上してくる。これは決して夢物語ではなくて、そういう状況が具体的な政策レベルで出てきていると思いますので、その中で「市場経済を超えた領域」が発展していくという、そのあたりがCOEにとっても大きなテーマとなっていくと思っております。

倉阪秀史 簡単に二点コメントしたいと思います。一点は、制度によるコントロールが権力的な側面を帯びてくるのではないかと、という点ですが、やはり制度をつくるプロセスを公開することが重要でありまして、その中で協働原則の

ような新しい考え方も出てきているわけです。ですから制度自体は権力的な要素が出てくると思いますが、制度をつくるプロセスの中で、できる限りそれを払拭していくことが必要かなと思います。

もう一つ、資本主義をどう位置づけるかということですが、私の感覚では、現在の経済の評価軸というものが狭すぎるのではないか。名目的な側面、フローの側面、私的な側面に偏重した評価軸自体がおかしいのではないか。名目的なものに対しては実物的な側面、フローに対してはストックの側面、私的な側面に対しては公的な側面、それぞれ座標軸を広げて考える必要があるのではないか。そうやって広げた結果、出てくる社会システムが、資本主義とは言われなくても、それは資本主義が良いか社会主義が良いかという問題ではなくて、座標軸を広げていく、今の流れで言うと CSR (corporate social responsibility) のような動きがありますので、そこを広げていくことによって、将来的に違った形のシステムが生まれてくるかもしれないなと思っております。

伊東 最後の CSR の問題について、この前驚いた発言があった。それは全国銀行協会の会長という人が、自民党に政治献金をしようとして、これが CSR だと。それはいったい何だ。政治家に献金をして見返りをもらう。そんなものが企業の社会的責任なのか。それを自民党は断った。それを貰ったら自民党のイメージが悪くなるから貰いませんと言った。これはもうお笑い草というほかはない。だから CSR は悪用されてはいけない。

最後にもっと重要なことは、広井さんが「福祉の問題とか格差の問題とかが残るではないか」と言われたことです。私は、civilizational minimum ということを考えるのです。文明が文明たるためにはこれだけは必要だというもの、これがないと文明という資格がないもの。その第一はアヒンサー。殺すな、暴力的であってはいけない。これは文明の原理の第一条でしょう。でも守られていない。むしろ文明の名において、殺戮が行われている。だから今、どこがいちばん非文明的な国かというのはすぐ分かる。アヒンサーが第一条、これが文

明の誇りなのです。

二番目は co-vivience。これは聞いたことがないと言われるかもしれない。辞書を引いてもありません、実は私が作ったのだからね。co というのは「一緒に」という意味で、vivience というのは vivo 「生きる」からきている。「一緒に生きるということ、共生」です。これは生物的共生の symbiosis ではない。このほか conviviality が用いられることがあるが、これは良くないですね、これは一緒にたのしく宴会などをやることでしょう。我々の言う「共生」という概念はそもそも向こうにはなかった概念です。だから英語で何というのですかと聞くのが無理なのだ。だったらラテン語から積極的につくる。文明と文明と一緒に生きる。つまり異なっている、異なっているからこそ、互いに励ましあい、対話しながら、一緒にいっそう良いものになっていける。だから違っていることが良いことなのです。みんな一色になってしまったら面白くない。だから二番目は文明の共生。と同時に自然との共生。これができない文明は文明の名に値しない。他をみんな俺の形でやっつけてしまおうというのは最低で、野蛮である。

三番目は equitability。equality ではないですよ。一つの能力です。文明と文明とが共存すればそれでいいのかというと、そうではない。そこには差別や格差がありますね。経済格差もあり、性差別もあり、人種差別もある。そういうものをなくしていく。そして平等なものへと近づけていく。それが equitability。フランス革命の égalité ではありません。

この三つが civilizational minimum なのだ、と私はこのごろ言っています。ですから広井先生がおっしゃった格差の問題や差別の問題は放置できないですよ。文明が違うのだからいいのだ、ということは言えない。

司会 ありがとうございます。時間がきておりますので、私のほうもいろいろとお話ししたいことがあります。公共哲学の議論をぜひご参照いただければありがたいと思います。例えば国家の問題については、「公 (= 国家、政府)

と公共(=人々)と私」という3元論を提案しています。これは公共哲学にとって一番重要な問題ですが、基本的には両先生と我々の考え方は変わらないのではないかと、思います。また科学技術の問題は『公共哲学8 科学技術と公共性』で議論されていますが、基本的には、科学技術自体は中立的なものだが、その発展や機能は経済や政治や価値観によって左右されるので、「公共善の観点から科学技術をどうコントロールするか」という発想が重要だろうと思います。あとは経済の問題ですね。「資本主義と市場経済の違いを強調して、市場経済を活かしながら資本主義ではない形(非資本主義的市場経済)を求めていく」というのが私の主張です。経済における「活私開公」という方向における「公共善経済」ないし「友愛経済」とも表現しています。説明が不十分なところはございますが、時間がずいぶん超過しています。今日は長時間にわたりご清聴いただき、どうもありがとうございました。